日本未来資源

2025年7月7日

決起会用、物語ホワイトペーパー

🔷 オープニング草稿　第一章

かつて日本には、村がありました。

そこでは、山を守る人がいて、川の声に耳を傾ける人がいて、
神社に祈りを捧げる人がいました。

家と家、世代と世代がつながり、

見えるもの——作物、建物、祭り

見えないもの——想い、祈り、感謝

それらが自然と循環していました。

しかし——

そのつながりを断ち切る力が、静かに、しかし確実に進行していきました。

村という単位は、やがて
「効率」や「制度」では測れないもの
となり、

人々の暮らしは、意図的に「独占」と「支配」のもとに分断されていきました。

いつからか、
隣に住む人の顔もわからなくなり、
地域で何が起きているのかにも気づけなくなり、
私たちは、占領されても声を上げられない状態に追い込まれていったのです。

村は消え、
耕作放棄地が広がり、
山も、川も、神社も、
本来の役割を果たせなくなっていきました。

それらの多くは、
すでに他の誰かに独占され、
地域の循環は静かに、しかし確実に、止まりつつあります。

けれど、私たちは知っています。地域の循環は、まだ取り戻せる。
失われた絆、忘れかけた感謝も、まだここにあります。
だからこそ——
取り戻さなくてはならないのです。

見えるものと、見えないもの。 光と音。 過去と未来。
分断されたそのすべてを、もう一度、結びなおすときが来ました。

🔷 第2章：問題提起

いまの世界 ― 川は、誰のものですか？
かつて、川はみんなのものでした。
水は分け合い、田畑を潤し、子どもたちは魚と戯れ、
その流れは、暮らしと命のリズムでした。

でも今――
川は誰のものになったのでしょうか？

誰かが独占し、
気付けば、地域の循環は途切れ、
村の絆は断たれ、
人々はそれぞれ、個別の戦いを強いられるようになりました。

あなたは、気づいているでしょうか？
地域の循環は、もう機能していない場所があることを。
それは「デッドスペース」となり、
誰にも知られず、活かされず、
ただ静かに“失われていく”ものになっているのです。

そしてその予備軍——
次に失われようとしている土地、建物、人とのつながりは、
どれほどあるのでしょうか？

仲間はいますか？
あなたは今、協力できていますか？

誰かと共に、何かを支え、守り、受け継いでいますか？

🔷第3章：再統合の鍵

「感謝ファネル」
――感謝から始まる地域と人の再統合プロセス

① 認知

耕作放棄地、独占が進む山や川、祈りが絶えた神社。

そうした場所の記録・リスト化を通して、

そこにどんな課題があるのかを明らかにします。

しかし、それは単なる「課題のリスト」ではありません。

かつてそこには感謝があった。

誰かが耕し、祈り、守り、つないできた場所。

その“ありがたし”に気づくことが、すべての始まりです。

② 興味・関心

● 感謝されていた過去の出来事に触れたとき
● 現在の活動で生まれている感謝の声を知ったとき

人は、「もしかしたら自分にもできるかもしれない」と心が動き始めます。

③ 検討

それは、自分にとって他人ごとではないかもしれないという気付き。
「この地域と自分はどうつながるのか？」
「自分にも感謝の物語を生めるのか？」

内面での準備が始まります。

④ 行動
実際の一歩を踏み出すステージ。
課題やナレッジの記録・報告・シェア
現地での視察・体験・支援
保護・対策・再生・発展

仲間づくり・シェアリングエコノミーへの参画
こうした行動が、再統合の具体的な形になります。

⑤ 賞賛
行動は感謝され、称賛され、物語として記録されます。
🌟 感謝アワード（THANKS AWARD）
特に大きな貢献や心を動かす行動には、
感謝の表彰＝アワードが贈られます。

これは、数値では測れない価値を称える新しい文化。
誰もが「名を刻む」ことができ、
未来へ贈る“感謝の証”として残されます。

⑥ リピート・紹介
感謝は、循環を生みます。

また参加したくなる
誰かに伝えたくなる

「一緒にやろう」と誘いたくなる

紹介と再接続が起こることで、地域循環が動き始めるのです。

この感謝ファネルは、
搾取でも評価でもなく、
共鳴と感謝の振動を再び社会に響かせるための仕組みです。

🔷第4章：象徴化ストーリーモデル

光と音、再びひとつになるために
かつて、すべてはひとつの振動でした。
その振動は、光となり、音となり、
見えるものと、見えないものに分かれていきました。

その分断によって、
人は祈りを忘れ、
土地は荒れ、川は濁り、
“ありがたし”の記憶は静かに失われていったのです。
けれど今、
感謝と循環を取り戻すために集った存在がいます。
分断されたものたちを、もう一度ひとつに結ぼうとしているのです。

🔶 光の記録者
失われた感謝と絆を“見える形”にする者。
課題や希望の場所をマップに刻む。
→ 見えるものを整え、認知の光を灯す。

🔶 音の共鳴者
人の心を震わせる、見えないものの力を信じる者。
感謝、共感、響きを広げる声。
→ 関心を引き寄せ、つながりを呼び戻す。

🔶 祈りの継承者
神社や目に見えない存在と人を結ぶ守人。
祈りを絶やさず、感謝の心を灯し続ける。
→ 精神性と文化の再接続。

🔶 土地の目覚め人
耕作放棄地に命を戻す者。
土地と向き合い、再び実りをもたらす。
→ 行動する力と、再生の現場担当。

🔶 川の流し手
滞っていた地域の流れを再び動かす者。
情報、資源、人の巡りをつくる。
→ シェアと循環の流路を拓く。

🔶 橋を編む者
世代と地域を静かに結ぶ者。
都市と地方、若者と高齢者、未来と過去。
→ 分断の隙間に橋をかける。

🔶 法の灯火
奪われぬよう、壊されぬよう、見えない盾を掲げる者。
→ 土地、祈り、活動を守る法と構造の力。

🔶 仕組みの設計者
想いを行動に変える道筋を描く者。
感謝ファネルの“器”を形づくる。
→ 感謝が続く社会のデザイン担当。

🔶 火を灯す人
迷いの中に先に立ち、熱を放ち、仲間を巻き込む者。
→ 情熱と実行力の先導者。

🔶 境界の守人
独占と共創の狭間に立ち、
その境界を見極め、共に進む道を示す者。
→ 土地の未来に方向性を与える者。

🔶 受け継ぐ芽
語られ、記録された物語から未来を感じ、
次の世代へそれを伝えようとする者。
→ 感謝と循環の“継承者”。

🔷 第5章：実行計画とKPI

ー 見える化から始める、地域循環の再設計 ー

✅ 財団の対象スコープ

耕作放棄地：再生対象としての土地の把握

山と川：独占・汚染・荒廃の現状把握と関係者ヒアリング

神社：祈りが絶えた場所、管理が行き届かない神社の整理

✅ ステップ1：見える化の実行

現在の「デッドスペース」の記録

実際に機能を停止している場所

将来の「予備軍」の洗い出し

管理者高齢化・担い手不在・法的問題がある地点

✅ スケジュール（初年度・短期アクション）

時期	内容
7月7日	決起会（本日）：体制確認、目的共有、範囲定義
7月中旬〜下旬	岐阜周辺エリアを中心とした 現地視察・関係者ヒアリング・初期記録
8月	データベース初期構築 （場所／状態／所有者／緊急度） 現場体験／感謝の可視化イベント実施
9〜10月	拡張候補地の追加、パターン化／ナレッジ化の開始 中間レビュー、必要があればスコープ修正
11〜12月	年度成果報告と「感謝アワード」初回開催

次年度展開の設計・パートナーシップ形成へ

✅ KPI（Key Performance Indicators）

指標　数値目標（2025年内）　　内容

🟢 デッドスペースの把握件数　　30件以上
　既に放棄・荒廃・機能停止が確認できる拠点

🟡 予備軍の抽出件数　　50件以上
　潜在的に危機にある土地・川・神社

🔵 視察・記録・撮影件数　50件以上
　現地訪問、写真・動画・地図・インタビュー等

🟣 ナレッジ登録数　30件以上
　解決事例、改善策、地域プレイヤーとの連携情報

🟠 体験・支援参加者数　　200人以上
　保全活動・清掃・奉納・記録・体験イベント参加者数

🟡 感謝アワード授与数　　10件以上
　課題解決により感謝された行動・人・プロジェクト

🔷最終章　第6章｜可能性の物語：ありがたしに立ち返る

かつて人は、
光を見ることで世界を知り、
音を聴くことで心を知った。

そして気づいた。
「今ここに在る」ことが
どれほど**有り難し（＝有ることが難しい）**かということを。

当たり前ではなかったこと。

言葉を持ち、想いを共有できること。

誰かのために、何かを願えること。

分断されず、共に在れること。

それはすべて、
時代やいのちを超えて繋がれてきた
奇跡のような可能性だった。

私たちは、失っていたのではない。
思い出す旅をしていたのだ。

まだ、できることがある。

まだ、消えていない想いが存在している。

まだ、未来を創る時間が残されている。

今日、私たちはこの場所に集った。
7月7日——願いが重なるこの日に。
空の上では、時を越えて出逢う星々。
この地上でも、場所も世代も越えて、
「未来をともに創る仲間」として出会えたこと。

この奇跡に、ただ、ありがとう。

感謝とは、過去への礼ではなく、
未来への約束。

「ありがたし」の原点に立ち返った私たちは、
それぞれの色と響きを持って、
これからの物語を紡いでいく。

ここが終わりではない。
ここが、始まりだった。

― 未来は、今ここから、共に ―

乾杯をしましょう！